

水沢出身の南宗派の画家

菅原竹侶



竹侶が描いたふるま絵
(水沢区大畑小路 高橋家)

留守家の家臣（家来）常恒の子として一八二四年（文政七年）九月九日に生まれる。幼い頃の名前は、圭之輔（その外に常元）、字（成人してからの名前）は素遊（遊とも書く。）、号（画家としての名前）を竹侶と言う。画屋名（絵を描く部屋）には臥雲楼、錦雲堂、以雲楼と名付け、水沢区の大畑小路に住んでいた。

竹侶は、『宮城県史美術編』という本に名前がのっているほど、中央や地方で活躍した画家である。また、すばらしい画家をたくさん育てたことも有名で、明治中ごろから昭和初めまでの地方絵事（地方の絵の文化）に花を咲かせる基礎をつくりあげた人でもある。

竹侶の弟、佐藤秀実（耕雲）が書いた『竹侶小伝』やその他の資料から竹侶の歩みをたどると次のようである。

八歳から勉学を須田一睡先生に、習字を砂金嘉門次郎先生に習う。絵も習いたいと思っていたが、その時代は絵を習うということが許

されない時代であった。

一八四八年（嘉永元年）、二十四歳の時、砲術（大砲をあつかう技術）と絵を習うため、江戸（今の東京）に行く。そして、いろいろな先生に学んだが、特に絵は、一年余りで先生を驚かすほど上手になった。絵を教えていた先生の三井梅崑は、詩や絵、特に墨竹（墨で竹を描くこと）が得意だったので、竹侶もその影響を大きく受けた。

二十五歳（一八四九年）から五十二歳（一八七六年）までは、仙台伊達家や水沢留守家に入入りし、砲術の指導をしながら、たくさん作品を描いた。慶長二年には、水沢城の大広間のふすまに『蛟竜幽谷に蟠屈する老松』を描いた。その後一八五九年（安政六年）の大火事や明治維新の時の生活の変化、大きな病気など苦しいことがたくさんあったが、どんな苦労にも負けず、多くの人とまじわりながら、たくさん作品を描きつづけた。

一八七六年（明治九年）に天皇が水沢に来た時には、山水画（山と川など自然の風景を描いた絵）を行在所（天皇がお休みになる場所）の壁に描くとともに画二幀（今のスケッチブック二冊）を天皇にさし上げ、嘉賞金（ごほうびのお金）をいただいたという。また、竹侶は多くの人を指導し、その中から、菅原嘯雲・砂金竹香・佐藤

耕雲・村上望山・三宮竹谷らの画人を育てている。また、幕末期には留守家の砲術指導に当たり、戊辰の役では活躍した。

五十四歳（一八七八年）には時代に合った南宗画法を学ぶために夫婦で上京している。

五十八歳（一八八二年）にはふたたび旅に出て、日光地方で三年間過ごした後、東京に出て浅草宗源精舎（お寺）に卜居している。その当時、新しい南宗画法を提唱していた滝和亭・木村香雨らと特に仲良くなり、南宗画新法の技を考えたようである。竹侶が学ぼうとしたことは、昔から伝わってきた南宗画法の方法だけで描くのではなく、自然の実際の姿を画面に浮き立たせ、見る人がその中に入りこめるようにすることであった。このため、それ以後の描き方は大きく変わっている。

六十二歳（一八八六年）になって、ますます絵が上手になり、絵事共進会（美術展）に、墨竹や山水を出品して優等賞を受け、「旧仙台藩に南宗画人竹侶あり」と言われるようになった。絵に一生懸命取り組んで、三十八年目のことであった。それから五年間は、日本全国の名所旧跡や建物のあった跡、有名な絵画など、自分の描きたいものを訪ね歩いて絵に描いた。そして、一八九一年、十五年ぶりに水沢に戻り、故郷に錦を飾った。

一年間水沢に住んでいる間に、「村景君御上江御行列之巻」一巻を、長男嘯雲といっしょに描き、旧武人としてのつとめを果たしている。また、古い友達をしのぶ追悼画会を開いたりして、ふるさとの友だちとの交流を深め、優れた絵画を残した。

六十七歳から六十九歳（一八九一年〜一八九三年）には再び東京に出て、浅草松葉町に住み、ますます有名になったが、古希（七十歳）も近くなり、体力の限界を感じた竹侶は、絵描き仲間四十数名に送られ、たくさん寄せ書きを記念として贈られて、一八九三年（明治二十六年）三月、水沢に帰り、その年の七月九日に六十九歳でなくなつた。霊は、長男嘯雲・二男竹香らによって、伯濟寺（水沢区中上野町）に葬られた。法名は「雲涛院墨阿



竹侶が描いたりゅうの絵
（水沢区大畑小路 高橋家のりゅうの間の天井）

竹翁居士」である。嘯雲がそのあとを継いだ、その子は学生のうちに若くして亡くなり、嘯雲も一九〇四年（明治三十七年）に亡くなり、それらの霊は砂金文洲家のあとつぎとなった二男竹香が弔っている。

以上のように竹侶は、年齢を重ねても絵に一生懸命取り組んだ人であり、大器晩成型（遅れて大成する器の大きな人物）で努力の人であった。

伊達藩四大画人の一人である、東 東洋は、「狩野探幽（有名な絵描き）は絵の修行について『画習三年、達者十年、功者五十年、上手百年、名人千年』（絵の修行は、習うのに三年かかるが、達者といわれるには十年、うまくなるには五十年、上手と言われるには百年、名人になるには千年かかる。）と答えた。人にもよるが、たいへん難しいことである。」と言っている。菅原竹侶の絵の修行とその功績は、まさにこの言葉通りであると思う。

*菅原竹侶の絵を見たい人は次の場所を訪ねてみてください。

・武家住宅資料館・水沢図書館・水沢区大畑小路の高橋家

*参考文献

『水沢画人伝』

『みずさわ浪漫』

『菅原竹侶』

水沢市立図書館

水沢市・水沢観光協会

水沢市教育委員会

水沢市埋蔵文化財調査センター



竹侶の絵が現在も残っている
(高橋家前にある説明書き)